

平成19年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：イネ・いもち病（No. 2）

平成19年7月20日
鳥取県病害虫防除所

1 情報の内容

穂いもちの伝染源となる葉いもちの発生が中間地～山間地で多くなっています。向こう1ヶ月の気象予報によると、前半は平年に比べ曇りや雨の日が多いと予想されており、葉いもちの発生はさらに増加し、穂いもちの発生も多くなることが見込まれます。穂いもちの被害を防ぐために、穂ばらみ期、穂揃い期の防除を徹底しましょう。

2 葉いもちの発生状況等

- ・葉いもちの発生は7月上旬以降、中間地～山間地を中心に増加しているが、地域間差およびほ場間差が大きい。
- ・7月上旬～中旬に行った定点巡回調査（県下36地点）の結果では、県全体の発生ほ場率は平年並の12.5%（平年：15.8%）であるが、中間地～山間地では、発生ほ場の52%が急性病斑の多いほ場であり、葉いもちの病勢が進展している。また、平坦地において、一部の無防除ほ場、残効の短い育苗箱施用剤を使用しているほ場等においても発生が散見されており、今後の発生増加に注意が必要である。
- ・プラスタム（いもち病発生予察システム）による葉いもちの感染好適日、準感染好適日が7月10日以降、断続的にみられ、7月18日～20日にかけて新しい急性病斑が発生していることから、中間地～山間地を中心に葉いもちの発生はさらに増加することが予想される。
- ・7月20日発表の向こう1ヶ月の気象予報によると、前半は平年に比べ曇りや雨の日が多いと予想されており、引き続き警戒が必要である。

3 防除上注意すべき事項

（1）葉いもち

- ・長期効果持続型の育苗箱施用剤が広く使用されているが、薬効が切れる時期となっていることから、ほ場の観察を徹底し、早期発見に努める。
- ・上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、直ちに粉剤や水和剤の治療剤あるいは、予防・治療剤を散布する。
- ・粉剤、水和剤の効果の持続期間は7日間程度であり、病勢が進展するようであれば、追加防除を行う。
- ・停止型病斑でも降雨が続くようであれば孢子形成するので、ほ場を経時的に観察し対応する。
- ・降雨が続く場合は、初期防除を失ないように雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後、約3時間経過すれば、降雨の影響は少ない。

（2）穂いもち

- ・穂いもちが発生してからの防除は困難であるため、葉いもちを抑制するとともに（上位葉での葉いもち発生と穂いもちの発生は密接に関係している）、穂ばらみ期および穂揃期の2回、粉剤または水和剤防除により被害を未然に防ぐ。
- ・葉いもちが発生している地域では、防除薬剤は治療剤あるいは予防・治療剤を用いることが望ましい。降雨が続く場合は、葉いもちと同様に、雨の止み間をみて防除

を行う。

- ・粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して、出穂前の所定期間に湛水散布する。なお、湛水散布に当たっては、各農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、農薬の流出防止に努める。

ブラスタムによる感染好適日の出現状況

日付	鳥取	岩井	青谷	智頭	倉吉	米子	下市	境	茶屋
7/1				-	-	-		-	-
7/2	-			-		-	-	-	-
7/3	-	-	-		-	-	-	-	
7/4	-	-	-	-	-	-		-	-
7/5	-		-	-	-	-	-	-	-
7/6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/10	-		-	-	-	-	-	-	-
7/11	-	-	-		-	-	-	-	-
7/12	-	-	-	-		-	-		-
7/13		-	-	-	-	-		-	-
7/14				-			-		
7/15	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/16	-	-	-	-	-	-	-	-	-

注) 感染好適日、準感染好適日

いもち病 防除薬剤

		用途等	薬剤名
葉いもち	粉剤または水和剤	予防剤	ビーム粉剤DL、ビームソル ラブサイド粉剤DL、ラブサイドフロアブル 等
		治療剤	カスミン粉剤DL、カスミン液剤 等
		予防・治療剤	カスラブサイド粉剤DL、カスラブサイド粉剤3DL ノンプラス粉剤DL、ノンプラスフロアブル ヒノザン粉剤2.5DL ブラシン粉剤DL、ブラシン水和剤、ブラシンフロアブル 等
穂いもち	粉剤または水和剤	上述の葉いもち防除剤を使用する	
	粒剤	予防剤	イモチエース粒剤 イモチミン粒剤 コラトップ粒剤5、コラトップ1キロ粒剤1.2 等